齋彌酒造店（さいやしゅぞうてん）

●文化財の種別及び部門	国登録有形文化財（建造物）
●文化財の名称及び員数	齋彌酒造店住宅・店舗　他１０棟
●登　録　年　月　日	平成１０年９月２日
●所　　在　　地	由利本荘市石脇字石脇５３
●所　有　・　管　理　者	株式会社　齋彌酒造店
●建　　築　　年　　代	明治３５年及び昭和初期

○概　要

本荘地域石脇地区は、藩政時代子吉川を通じて日本海水運の港町として栄え、岩城氏亀田藩の重要な商業地であり、明治２２年には、子吉川対岸の本荘町と合併し、商業に加え、行政上も対岸と一体になりました。明治３０年代から４０年代にかけては、近代工業が本市域でも本格的に展開される中、石脇に立地する工場の割合は高く、石脇には２軒の酒造業がありました。これは「新山」の麓の石脇東部が豊かな湧水に恵まれていたことに由来し、大正１３年の「本荘町業名録」によると、市内醸造業の半分にあたる５軒が一本の道沿いに隣立し、酒類をはじめ、味噌醤油等の醸造街が形成されていたことが分かります。加えて、石脇地区は、戦後町並みが大きく変化する中、周辺部が宅地化されながらも、今なお旧態を忍ばせる商家の家並が残る地区です。

上記５軒の醸造元のうちのひとつである齋彌酒造店は、明治３５年１０月に創業しました。創業者の齋藤彌太郎は事業を興したのみならず、本荘町長を務めた人物であり、私財で旧本荘城跡を買い取り、町に寄付した篤志家としても知られ、社名の「齋彌」は創業者の名前に由来します。

道路に面した蔵や事務所等は明治３５年創業時のもので、昭和初期頃までにほぼ現在の形になりました（仕込み蔵のレンガ造り煙突に関しては、昭和２０年頃のもの）。敷地は新山の麓の傾斜地で、高低差は６ｍあり、工場はこの斜面を利用し、階段上に造られています。一番高い場所にある精米所から酒造りが始まり、その下から出る伏流水を利用し、仕込蔵、貯蔵蔵と坂を下って工程が進み、その手前に事務所（店舗）があり、市道を挟んでビン詰め工場という配置です。坂道醸造ともいうべきこの造りは、酒どころ秋田県内でも、めずらしい構造として知られています。

齋彌酒造店住宅・店舗

●名　　称	●年　　代	●特　　徴
齋彌酒造店住宅・店舗	明治３５年頃	店舗は、道路に面して庇を差し出すなど基本的には大規模町家と似た構成になりますが、２階に洋風のデザインを取り入れるなどその意匠は独特です。店舗の東に庭を囲うように建つ住宅の外観は和風の意匠で、店舗と好対照をなしています。
齋彌酒造店ギャラリー（旧米蔵）	明治３５年頃	店舗の西方に壜蔵と漬物蔵の間に並んで位置する平屋建の土蔵です。３棟がひとつの覆屋のなかにおさまっています。内部を改修してギャラリーとして利用されており、両開き土戸のまぐさに装飾を施すなど特に豪華なつくりの蔵で、屋敷構えの主要な構成要素です。
齋彌酒造店漬物蔵	明治３５年頃	店舗の西方に壜蔵、米蔵と並んで建つ平屋建の土蔵です。斎彌酒造店が所在する石脇地区は、明治・大正期に醸造業者が軒を並べて賑わったところで、明治３５年の創業時の建物が多く残る斎彌酒造店は往時の繁栄を偲ばせるものとして親しまれています。
齋彌酒造店壜蔵	明治３５年頃	店舗の西方に米蔵、漬物蔵と並んで建つ平屋建の土蔵です。３棟をおさめた覆屋は、側面には板を張りますが、妻側では下方を下見板張り、上方を漆喰で塗り込め土蔵風につくられています。また、道路に面した屋敷地の境界にあり、屋敷構えをひきしめる役割を果たしています。
齋彌酒造店事務所	昭　和　初　期	店舗・住宅の西北方、漬物蔵の北に位置しています。内部を改修して事務所としたもので、もとは精米所として使われていました。社名の斎彌は創業者の齋藤彌太郎の名にちなんだもので、彌太郎は本荘町長を務めるなど地域の有力者だったそうです。
齋彌酒造店釜場	昭　和　初　期	事務所の北側に並んで建てられた木造、平屋建の建造物で、木造トラスによる小屋組で高く広大な空間を確保し、作業場としています。酒造の生産量が増加した昭和初期の建築で、当地の酒造業を中心とする醸造業の発展をうかがうことができる建物です。
齋彌酒造店西蔵	昭　和　初　期	釜場の北に建ち、南北方向に棟を向けて長大な規模を持つ土蔵で、内部には酒貯蔵用のタンクを並べてあります。また、中蔵・東蔵と一連の覆屋をかけています。釜場とともに酒造の生産量が増加した昭和初期につくられた施設で、地域の産業の発展を物語る貴重な建造物です。

齋彌酒造店中蔵	明治３５年頃	店舗・住宅の北に庭を挟んで建てられている、比較的規模の大きな平屋建の土蔵で、内部に酒貯蔵用のタンクを並べてあります。東蔵、西蔵とともにひとつの覆屋のなかにおさまっており、米蔵等に比較すると簡素なつくりですが、酒造工程を知る上で欠くことのできない建物です。
齋彌酒造店東蔵	昭　和　初　期	住宅の北に庭を挟んで建つ平屋建の土蔵で、中蔵、西蔵とともにひとつの覆屋のなかにおさまっています。覆屋は土蔵の壁の周囲に板壁の囲いを設けた形で、簡素ながら規模が大きく、屋敷構えのなかでひときわ目立つ存在です。
齋彌酒造店門	明治３５年頃	主屋（店舗・住宅）の座敷への出入口として道路に面して主屋と文庫蔵の間につくられた小規模な門で、道路側の屋敷構えを整える役割を果たしています。 両脇に潜り戸をもうけた武家屋敷風の門で、店舗の入口にある唐破風状の庇と対照的な意匠です。
齋彌酒造店文庫蔵	明治３５年頃	主屋（店舗・住宅）の東方、屋敷地東南隅に建つ２階建の土蔵で、覆屋の中に入っています。覆屋は上部を漆喰塗、下部を下見板張りにして土蔵風の意匠とする珍しいつくりです。西南隅にある壜蔵等の覆屋とともに、屋敷構えの上で効果的な役割を果たしています。

由利本荘市教育委員会